

子ども国際理解サマースクール

事業代表者：宇都宮大学国際学部 教授 田巻松雄

1. 事業の目的・意義

宇都宮市教育委員会東生涯学習センターにて、ゲームや遊びの中で、相互理解や国際協力に関心を持ち、日本に暮らす外国人たちと接し、世界に目を向けるきっかけとすることを目的に「子ども国際理解サマースクール」を開催しました。宇都宮市内の小学校4年生～6年生の約30名と大田原市にあるソシエダ・ドゥカシオ・ブラジリアン・スクール（以下、SEBS）の児童生徒との交流を企画、宇都宮大学の学生が主体となって運営しました。グローバル化社会における国際理解には、さまざまな背景を持つ子どもたちが、共に生活し、学習し、そのための新しい関係をどのようにつくるのが大切です。このような観点から、相手の国・文化・習慣を知り認め、お互いに協力することの大切さを体験するために、子どもが主体的に学習する場を提供することは、国際理解教育の面で意義があると考えられます。

2. 事業内容

(1) 第1日目：7月25日10時～14時

テーマ「ゲームいっぱい(^^)友だちいっぱい♡」

1日目は、大田原市にあるソシエダデ・エドゥカシオナウ・ブラジリアン・スクール（Sociedade Educacional Brazilian School、SEBS）に通う児童生徒との交流がメインとなるプログラム構成でした。この交流は毎年行っていて、今回で3度目です。

開校式の後、まず、ブラジルの生活習慣である10時のおやつを、ちょっとした異文化として体験しました。ブラジルから輸入されたクッキーとトロピカルなジュースを用意しました。日本人の受講生の多くは、「おいしい！」「もっと欲しい！」とはじめての味に目を丸くして、おいしくいただきました。

その後、3つのゲームで交流しました。

- ① 「サインちょうだいゲーム」
講師の先生方からポルトガル語での、自分の名前の伝え方や相手の名前の尋ね方など学習し、それを実践し、相手からサインをもらうゲームです。子どもたちは、ご褒美シールを目当てに、たくさんのお友だちと会話し、10分間で10人以上からサインをもらえた児童も何人もいました。
- ② 「動物のオーケストラゲーム」
まず、講師の先生方から動物名とその鳴き声をポルトガル語で教えていただきました。日本語とポルトガル語での鳴き声の違いに非常に驚いていました。覚えた後で、動物のパネルが提示され、その動物の、日本とブラジルの国旗のどちらか揚がった方の鳴き声を瞬時に判断し、音楽に乗せて言う、楽しいゲームでした。

③ 「協力ゲーム」

最初に、人数分のイスを用意し、全員で座ります。次に、イスを1脚とって、また全員で座ります。そうして、1脚ずつ減らしてはまた全員で座ることを繰り返すと、だんだん全員で座ることが困難になってきます。



最後は、たった1つのイスに全員が座らなくてははいけませんので、自然

に全員が知恵を出し合い、話し合い、協力し合います。子どもたちは、コミュニケーションをとることの大切さを体感しました。最終的に、体の大きい子が土台になり、小さい子たちを膝に載せながら、見事に1つのイスに全員で座ることが出来ました。

ゲームの後は、昼食をみんなで一緒にいただきました。昼食で出たゴミの回収は、分別しながら、6年生が面倒をよくみてくれました。

その後は、食べ終わった順に、牛乳パックを利用した「カエル」と「ウサギ」の制作に入りました。びよんびよん跳びはねる簡単なおもちゃ作りを通して、さらに仲良くなりました。

続いては、うちわの制作です。何か日本的なもので、夏に関係するものをみんなで作れたらいいな、と講師の先生たちが考えてくれました。こちらで用意したペンやクレヨンを譲り合いながら仲良く使って、思い思いの絵を描き、うちわの骨に貼り合わせ、今日の思い出としてお土産に持ち帰りました。とてもきれいにデザインする日本人児童や、日本語を上手に書くSEBS児童もいて、驚きました。今年の夏は暑かったので、自分で作ったオリジナルなうちわを使ってくれたことでしょう。

最後に、SEBS児童からブラジルと日本の国旗を描いたカードを日本人児童一人一人にプレゼントしていただきました。ブラジルの国歌の斉唱もプレゼントしていただきました。はじめて聞くブラジル国歌、そしてその歌詞が長いことには、日本人はみんな驚きの様子でした。この夏のロンドンオリンピックでブラジルは3つの金メダルを取りましたので、受講生の中でブラジル国歌をテレビで聞いた人もいたかもしれませんね。



そして、いよいよお別れです。SEBS の子どもたちが帰る際、何人もの日本人児童がバスまで見送り、「ばいばい!」「またね!」といつまでも手を振り、別れを惜しましました。

第2日目：7月26日10時～12時

テーマ「世界を知ろう&世界から学ぼう2012

～ネパール編～

今年から、世界の国や地域から1つを選び、その国や地域について学習することにより、国際理解教育の一助となるよう構成されたシリーズにしていきます。今年も、半田好男(栃木県立茂木高等学校教諭、海外青年協力隊OB)先生のご協力により、ネパールについて学習しました。

以下、半田先生からの事後メッセージを引用いたします。

皆さんとの出会いは大変楽しいものでした。理由は3つあります。1つは、自由な発想でたくさんの意見がでました。2つめは、新しい友だちと協力し合っってチームワークを発揮していました。3つめは、みんな生き生きとしていました。そのため充実した時間を過ごすことができました。

今回は、大きく2つのことをやりました。1つめは、ネパールの生活道具を目の前にしていろいろ考えてもらうことです。生活道具には、そこで生きる人たちの歴史と知恵が詰まっています。皆さんは、目の前の道具に触れ、五感を働かせ、いろいろな気づきや発見をしていました。気づきや発見は、新たな疑問や考え方に発展し、さらに行動に結びつく原動力になります。

今回やった2つめは、「学び」について考えることです。学べないことで、いろいろ不便なことや不利益を被ることがあります。学校へ行っていないことで、臆病になりチ



ャレンジできなかつたり、自分が周りの人より小さな存在に感じたりするかもしれません。「学び」は

その内容とは一見関係のなさそうな人の生き方にまで関係してくるのです。世界には学びが保証されていない人々があります。日本で生活していると、みんな学校へ行っているの、分かりにくいかもしれません。しかし、今回のような視点で日本を見ると、日本にだってネパールと同じように苦しんでいる人がいることに気づくかもしれません。身近なことが今までとは違って見えてくるのです。

今回の新しい出会いや気づきが、皆さんの未来に少しでも役に立てれば幸いです。

3. 事業の成果

・参加した子どもたち

日本語の理解が不十分なブラジリアンスクールの子どもたちと、ポルトガル語のわからない宇都宮市内の子どもたち。相手の言葉がわからないもの同士のはずなのに、あつという間に一緒に活動できます。その能力には、驚かせられます。インターネットで簡単に調べられる時代ですが、直接ふれあって、協力し合っって、交流することで、忘れられない経験を体感することができたことでしょう。ブラジルやネパールについて、知らなかったことを知るとき、子どもたちの目の輝きから、本事業の成果の大きさを知ることができました。

また、半田先生が持参したネパールの生活品や教科書を実際に手にし、ネパールの暮らしについて学びながら、読み書きができることの重要性を知り、心の成長を感じ取ることができました。

・運営協力した本学の学生たち

国際理解教育の意義と課題、小学生が関心を持って学べる国際理解教育とは何か等について、運営に協力することを通して理解を深めることが出来ました。

4. 今後の展望

スクール終了後、会場の片付けを手伝ってくれた日本人の子どもたちに、

「来年の『世界を知ろう&世界から学ぼう』では、どんな国をテーマにしようか」

と聞いてみたところ、「韓国にして!」や「マレーシアがいいなあ。」という受講生からの声が聞こえました。さあ、来年はどこの国にしようか、今からワクワクしています。様々な交流活動により、未来の日本を担う子どもたちに、国際理解の種をまき、育てること、そして、本学の学生に指導実践の場を提供すること、それらを通して、HANDS プロジェクトは地域に貢献していこうと考えております。